

# 戦争を語る、オンラインワンの博物館を

戦艦「大和」の復元物を媒介に、  
歴史の証人ともよばれるべき  
戦争体験者の証言が、今、  
呉市海事歴史科学館に集まりつつあるという。  
同館の戦争の悲惨さ、平和の尊さを  
伝えてゆこうとする活動を紹介したい。

齋藤 義朗 (さいとう よしろう)

呉市海事歴史科学館(大和ミュージアム)学芸員

二〇〇五年四月三日、広島県呉市に新しい博物館が誕生した。その名は呉市海事歴史科学館。愛称「大和ミュージアム」といえばわかっていただけだろうか。日本海海戦から一〇〇年、太平洋戦争終戦から六〇年目、映画でもとりあげられ、戦争の時代を再検証する動きが活発化するなかでオープンし、初年度は一六一万人の来館者を記録した。二年目となる二〇〇六年二月末には累計二六〇万人を達成した。

八年の歳月を要した。紆余曲折を経て二〇〇三年に呉市で一〇分の「大和」建造が決定。初めてつくしの巨大プロジェクトは困難続きであった。ミュージアムの開館期日は決定済み。残された製作期間はわずかに二年(実質一年半)。資料分析やコスト面とともに、時間という大きな壁が立ちはたかる建造となつたのである。

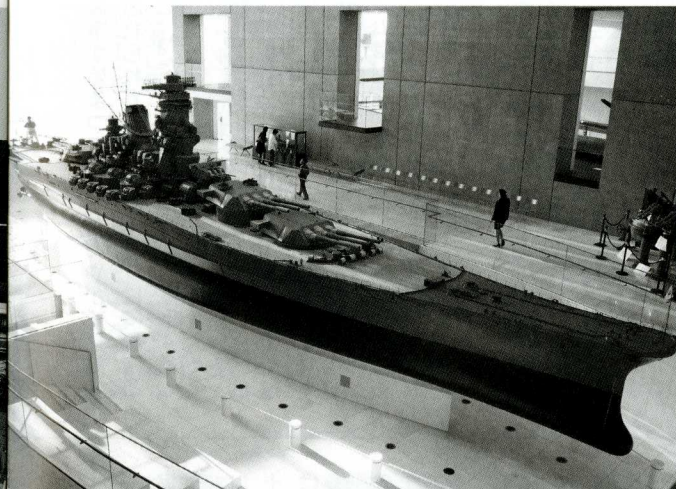
戦艦「大和」は、昭和一〇年代の日本の技術レベルの高さを示すと同時に、時代の矛盾と戦争のむなしさを映す鏡でもある。真珠湾攻撃から八日後の一九四一年一月二六日、世界最大・最強の戦艦として登場しながらも航空戦力が主役となつた太平洋戦争を象徴するように、新造時の優雅な佇まいは増設された対空機銃でハリネズミのように変貌し、一九四五年四月七日、沖縄海上特攻の途上、米軍機の猛攻により三〇五六名の人命とともに悲劇的な最期を遂げた。今も三〇〇名近くの乗組員が氏名不詳のままとなっている。

「大和」に関しては情報が極めて嚴重に統制され、国民の目から隠されたまま建造され、沈没した。国民の大多数が存在を知つたのは戦後になつてから。終戦と同時にほとんどの記録類が灰となつた幻の戦艦である。その「大和」を一〇分の一スケールで実際に立体化するためには、全長二六三メートルの巨艦を一センチメートル単位で分析する必要があつた。模型の世界では、一ミリメートル単位の精度が要求されるからである。従来の研究蓄積に加え、あらたに収集した「大和」の原図面約二〇〇枚(部分図ばかり)と写真約一〇〇点、海底の「大和」を撮影した六〇時間におよぶ潜水調査映像などをもとにした戦艦「大

元「大和」2番主砲砲員 戸田文男さんが描いたスケッチ



船体部分建造中の1/10「大和」。これだけで20トンを超す



呉湾側から見た「大和ミュージアム」の外観

甲板材の木目にまでこだわった1/10「大和」

瀬戸内海沿岸に延びるJR呉線の呉駅から専用歩道で徒歩五分、ミュージアムは戦艦「大和」建造の舞台となつた呉海軍工廠造船ドック跡を見渡す位置に建っている。  
館のコンセプトは、明治以来、海軍工廠とともに歩んできた軍港・呉の歴史と、そこで培われた造船ほか各種技術を紹介し、「大和」の最期などを通じて戦争の悲惨さ、平和の尊さを伝えようというもの。その展示の中核に位置するのが一階展示フロア中央にそびえる一〇分の一スケールの戦艦「大和」である。

## 一〇分の「大和」を造る

模型といいながら、その圧倒的な迫力に訪れた人はみな息をのみ、一瞬足を止めたのちに周囲を歩き始める。全長二六・三メートルの超巨大模型は、図体が大きいだけでなく、可能な限り細部にわたって「復元」したものである。製作した側としては、単なる大型プラモデルの展示と思つてはだきたくはない。

ミュージアム建設にあつたのは、「どこにもない、呉でしかできないオンラインワンの博物館」を作るため、呉の造船技術の歴史を展示するシンボルが必要だつた。そこで出たのが一〇分の「大和」建造計画。潜水調査などを経て図面の製作に六年。一九九七年の立案から完成までには

和「復元は、気の遠くなるような作業となつた。それでも不明箇所は数限りなかつた。そこは当事者への聞きとり調査で補うことになつた。例えば「大和」の代名詞ともいえる四六センチ三連装主砲塔は、概略図がある程度で、出入口のある背面部の考証は憶測の域を出ないものだつた。そこで元「大和」二番主砲砲員だつた戸田文男さん(当時、上等水兵)にうかがつたところ、「大和」が沈没直前、左に大きく傾斜した際に、扉を開けられず砲塔内に取り残された者がいたという辛い体験を語つていただいた。この証言から背面出入口のとり付け状態などが明らかになつたのである。

実際の製作段階でも、あらたな資料が発見されるたびに、作っては直しを繰り返して、試行錯誤の連続であつた。結局最後は損得勘定を度外視した「現代の匠」たちが熱意と気迫で納期に間に合わせたのである。一〇分の「大和」が形になつてくるにしたがい、製作担当者一同は、「大和」が鋼鉄の箱ではなく、三〇〇〇人が生活を営み、生命を託した、生きた建造物であつたことを実感するようになっていった。そして二〇〇五年二月一日、一〇分の「大和」は完成した。戦艦「大和」にかかわつた人たちが無数にいたように、一〇分の一スケールで復元した「大和」もまた元乗組員や遺族の方々、建造スタッフほか多くの関係者の想いが込められた艦となつたのである。

## 集まる記憶、よみがえる記憶

困難極まる道のりのなかで建造した一〇分の「大和」は、ミュージアムの来館者に科学技術



元「大和」2番主砲砲員 戸田文男さんが描いたスケッチ



の発展と戦争の悲劇という「科学技術の光と影」両面のメッセージを送っている。ところが開館後同時に一〇分の「大和」があらたな資料や情報をもつ歴史の証人ともいうべき人たちとミュージアムをつなぐ役割も果たしていることを筆者は実感するようになった。ミュージアムの開館と一〇分の「大和」の展示を契機にあらたに連絡をとることができた元乗組員や遺族の方々ほか関係者はのべ三〇人以上にのぼる。学芸員がいる研究室へ直接連絡をいただくこともあるが、ほとんどの場合、最初に接するのは展示室内各所で解説・案内をもらっているボランティアガイドさんたちだ。彼らを経由して学芸員へ情報が集められるのである。

元乗組員の方の場合、最初から「大和」乗艦者であったことを口にする人はまだ。大半がガイドさんとのやりとりのなかで明らかになる。多くがシルバー世代で構成されるガイドさんたちは、戦争の時代を生き抜いた世代とも年齢的に近く、孫のような学芸員と比べて身構える必要もない。加えてガイドさんたちは話術も巧みで古い話には事欠かない。そうするうちに「じつは自分は『大和』のあの部分におったんですよ」と一〇分の「大和」のある部分を示されるのである。

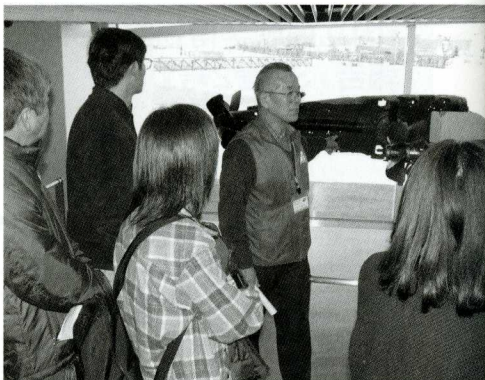
このような話は「大和」に限らず、大型資料展示室内にある「零式艦上戦闘機(零戦)」などでも同じである。戦争中、海軍の基地や航空母艦などでパイロット、あるいは航空機整備員をしていた方々の情報をえたのもガイドさん経由だった。そこから連絡をいただいて学芸員が展示室へ駆けつける。ミュージアムへ訪れる歴史の証人の引き出す能力が不足していると感じた場合には、館長の戸高一成や統括学芸員の相原謙次をインタビュアーとして巻き込んでの作業となる。企画展で募集、依頼した証言も含めると、こうして撮りためた六〇分ビデオテープは四〇本近くになった。これらは多くの方に見ていただけるよう準備を進めている。

「大和ミュージアム」では、科学技術と歴史の双方を展示することで歴史科学館の名称をとっている。その技術はよく「両刃の剣」と表現される。暮らしを豊かにできるはずのすばらしい技



1階「呉の歴史」展示室。  
ここで証言者映像を聞くことができる

零戦62型や人間魚雷「回天10型」を  
展示している大型資料展示室



活躍するボランティアガイドさん。  
筆者よりも解説がうまい

発掘においても、ボランティアガイドさんは多大な貢献をしているのだ。  
ミュージアムでは、週末ともなるとおじいちゃん・おばあちゃんから子・孫までの三世代にわたる家族連れが増える。そして歴史展示室内では高齢者が先生となつて、戦争中の話を、関連する展示資料をもとに家族に説明している場面に遭遇することが多い。ガイドさんやほかの来館者も含めて、若い世代が生徒になつて説明を聞く即席ミニ講座が開かれていることもしばしばである。後でうかがうと、家庭では戦争中の話をしたことはなかったが、ミュージアムの展示を見て話す気になったという方ばかりだった。

## 「記憶」を「記録」に

終戦から六一年。二七六人いた沖縄海上特攻時の「大和」乗組員生還者も二〇人を割り込んだ。戦争の時代を経験した世代は高齢となり、ここ数年で加速度的に減り続けている。来館者に「生の証言」を聞いていただくころにも、体力的に不安を抱える方がほとんどだ。しかし当事者の話ほど説得力のあるものはない。そこでミュージアムの歴史展示室やライブラリー内には証言者映像コーナーを設け、一九九人の方々の話を聞いていただけるようにしている。また、ミュージアム開館後に出会うことができた歴史の証人たちには、後日、ビデオカメラの前でお話をいただくようお願いしている。住所が遠方で、ミュージアムへご足参願うのが難しい場合、カメラと三脚を抱えてこちらから訪問している。お話をうかがうにあたり、筆者に歴史の証人の記憶を

術であつても、人間の使い方次第で悲惨な結果を生む危険性をあわせもつ。一〇分の「大和」はその象徴であり、戦争の悲惨さ、平和の尊さを我々に語りかける。それゆえミュージアムでは、戦争の時代の「記録」と「記憶」を証言者映像として多くの人たちのために残し、伝えていこうとしている。これは当館に課せられた義務だと筆者は思っている。